



春日井市遺跡解説パンフレット その7

御旅所古墳

－ 須恵器系埴輪誕生History －



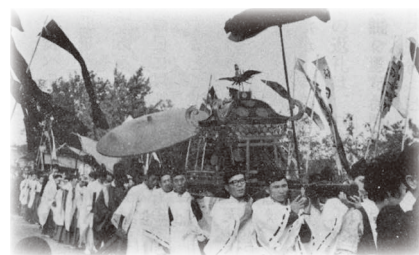
おたびしょ あじよし 御旅所古墳と味美古墳群 ～ 前方後円墳と円墳の関係をめぐる諸問題 ～

御旅所古墳は、春日井市二子町2-11-2に所在する直径約35m(復元値)の円墳で、6世紀初め頃の築造と推定される。地形上は、庄内川右岸に面した鳥居松面の段丘崖＝標高約10mに立地し、二子山古墳・白山神社古墳・春日山古墳の3基の前方後円墳と共に味美古墳群を形成している。

現況は白山神社(二子町2-11-3)の境外社として墳頂に小祠が置かれ、古墳の名称は、白山神社の例大祭に際して神輿が渡御する「御旅所」に由来がある。

周辺環境は、昭和30～40年代の区画整理に伴い水田の市街化が進行する一方、古墳は「二子山公園」・「春日山公園」用地に保全され、「二子山公園」は平成3～8年度にかけて、芝生広場・園路・「ハニワの館」を中心とする再整備が行われた。

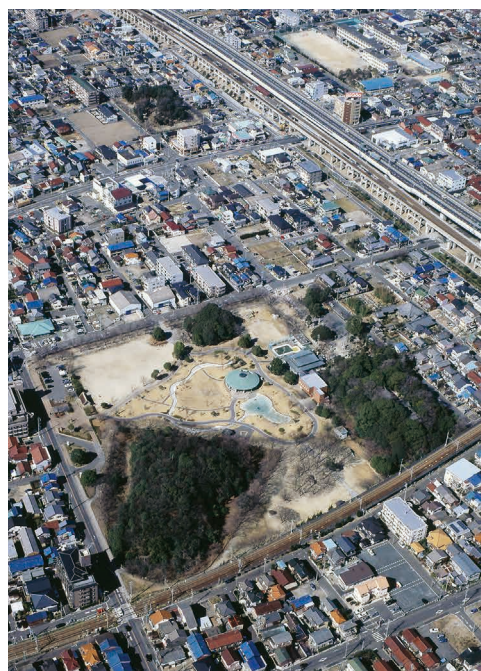
また、二子山古墳は昭和11年12月16日付けで国史跡、白山神社古墳・御旅所古墳は昭和58年3月30日付けで県史跡に指定されている。



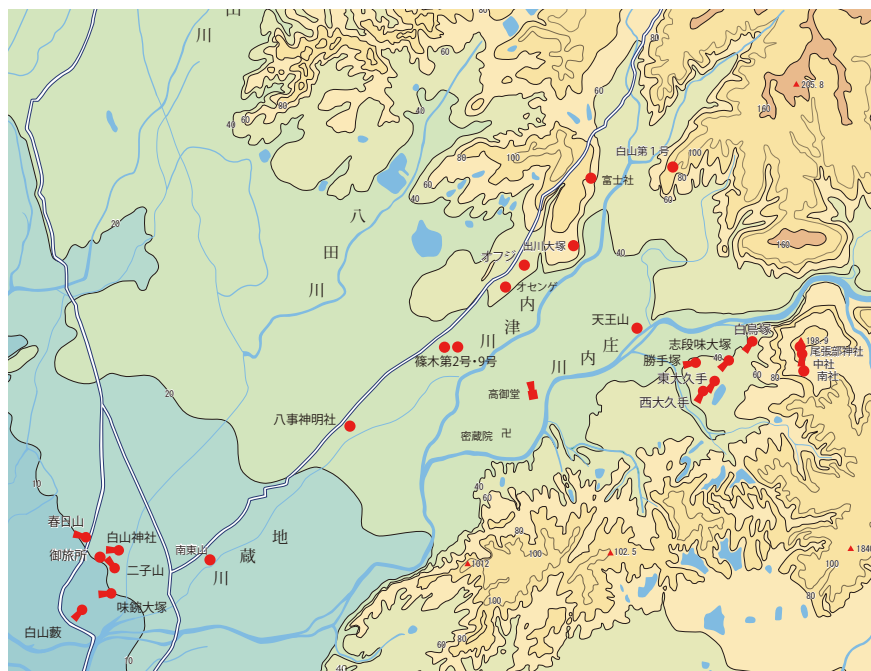
白山神社例大祭 『春日井の文化財』より転載



二子山公園 奥：二子山古墳



味美古墳群航空写真



春日井市内・庄内川流域の主要古墳

昭和50年3月、コンクリート土留め工事に伴い墳丘の外周を掘削した際、原位置を留めた埴輪列の一部が露出し、一定量の埴輪・須恵器が採集された。その後、平成3年の二子山公園再整備事業に伴う試掘調査により、造成土・水田耕土下に埋没した周溝が確認された。

埴輪列は段築平坦面に位置し、外部施設として埴輪・周溝を有するが、葺石は認めない。そのほか、主体部の構造や副葬品は、正式な発掘調査が行われていないため不明である。



コンクリート土留め工事に伴う埴輪列の緊急調査



高御堂古墳 竪穴式石槨



天王山古墳出土壺形埴輪



親王塚古墳 横穴式石室



高座山第1号墳 墳丘・石室全景



三明神社古墳現況



篠木第2号墳 墳丘全景



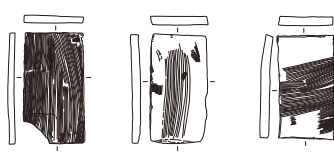
篠木第2号墳 墓石・段築平坦面検出状況



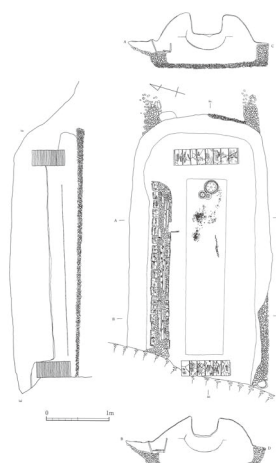
出川大塚古墳出土鏡[複製]



味美古墳群航空写真



白山藪古墳 墳実測図



白山藪古墳 主体部実測図



明治17年 味鏡村地籍図「春日井シンポジウム資料集」50頁

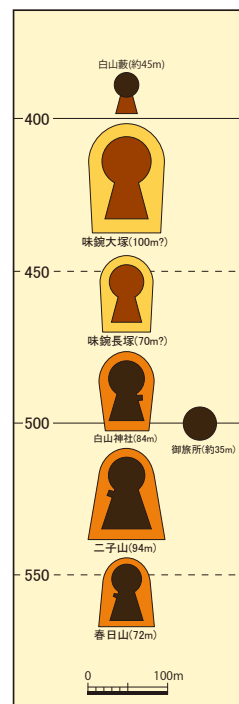
春日井市内の主要古墳は、庄内川流域の自然堤防帯と愛知県道508号内津勝川線(旧国道19号線)沿線の段丘崖・丘陵尾根上に分布する。

庄内川流域では、4世紀前葉の高御堂古墳(約63m)から4世紀中葉の天王山古墳(約34m)へ、前方後方墳から円墳への首長墓系譜をたどり、共に墳丘上に壺形埴輪を配列し、高御堂古墳は竪穴式石槨を主体部とする。その後、古墳築造は長期に亘って途絶え、6世紀中葉の親王塚古墳以降、7世紀後葉にかけては神領古墳群・気噴古墳群・高蔵寺古墳群・高座山古墳群など、横穴式石室を主体部とする直径10~20m前後の小規模な円墳が盛行する。

段丘・丘陵では、4世紀後葉の篠木第2号墳(約41m)・出川大塚古墳(45m)のほか、富士社古墳(40m)・オセング古墳(約42m)・篠木第9号墳(43m)の40m級の円墳が継続する。一方、5世紀以降の首長墓は前方後円墳を中心として、墓域は味美古墳群・勝川古墳群へと集約される。

味美古墳群は4世紀後葉の白山藪古墳(約45m)を初源とし、味鏡大塚古墳(約100m)・味鏡長塚古墳(約70m)・白山神社古墳(84m)・二子山古墳(94m)・春日山古墳(72m)まで、約150年に亘って6基の前方後円墳による首長墓系譜をたどる[味鏡大塚・味鏡長塚の2基は地籍図による推定復元/白山藪古墳は円墳説もある]。付近一帯は「百塚」と俗称し、明治期の地籍図等によると味鏡地区29基・味美地区11基の「塚」が記されている。戦中・戦後を通じて耕地開墾・市街化により大部分が未調査のまま滅失したが、地元の社寺(味鏡神社・護国院)に5世紀前半から6世紀後半にかけての鏡・石製品・須恵器・埴輪などの遺物、石棺が伝わり、古墳群の様相の一端が知られる。

円筒埴輪の型式編年によると、御旅所古墳は、3突帯4段の規格と須恵器系埴輪の製作技術を二子山古墳に先行導入したことが明らかとなっている。前方後円墳による首長墓系譜に対して、円墳である御旅所古墳は「陪塚」=下位・従属的な見方が一般的であるが、被葬者像を始め、歴史的再評価が必要である。



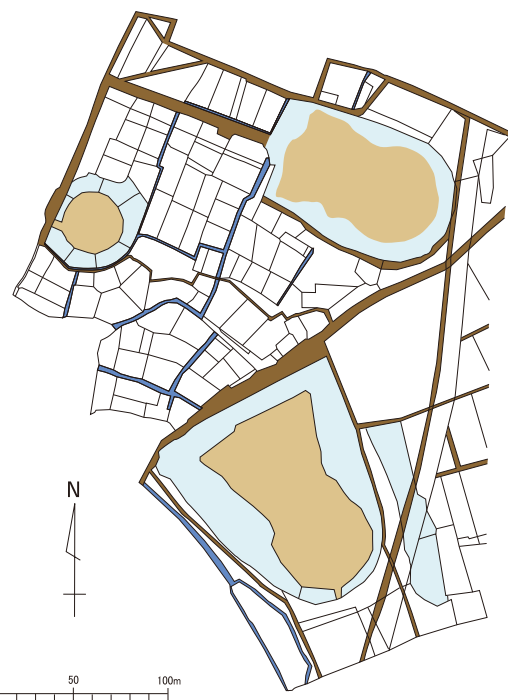
味美古墳群編年表

御旅所古墳の墳丘構造 ～ 墳丘を巡る壮大な埴輪列と須恵器・埴輪生産の結合 ～

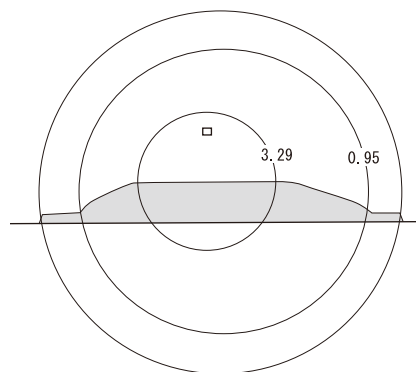
御旅所古墳の現況・外観は、周囲の公園造成や玉垣を配したコンクリート土留等により一定の改変が進み、直径約25m・高さ約2.5mのマウンドを残すのみとなっている。一方、明治21年の地籍図によると、白山神社と参道が通じ、直径約31mの墳丘のほか、周囲には周溝を示唆する幅8～10mほどの円形的地割が認められる。平成3年の試掘調査により埴輪片を伴う周溝埋土を確認し、周溝を含む最大径は約50mとなる。

墳丘規模については、現況測量に基づき①『愛知縣史蹟名勝天然記念物調査報告第十三』（1935年）の南北22.7m・東西23.6m・高2.5m、②春日井市教育委員会（1967年）の径31m・高2.9m、③春日井市教育委員会（1991年）の径31m・高2.7m、④愛知県史編さん室（1996年）の径35mとの報告がある。

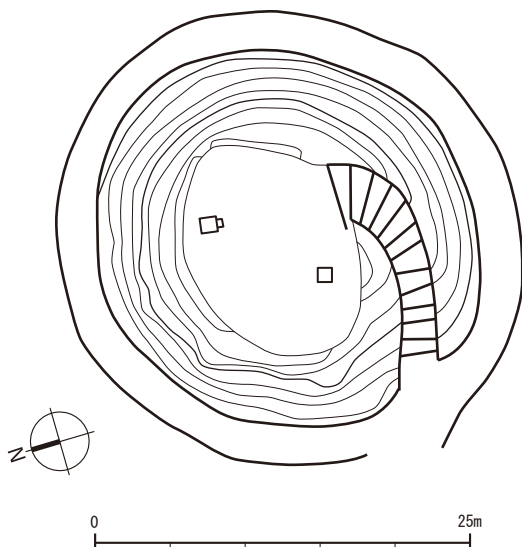
①は略式図ではあるが、唯一、公園造成前の旧況を記録している。22.7～23.6mの円形マウンド(=墳丘上段)の周囲に幅2.5～3.3mの段築平坦面があり、水田面(=周溝)との境界に75cmの明瞭な段差が遺存する。後の径31mとの計測値は地籍図(=段築平坦面の外縁)に一致し、墳丘全体ではなく、段築の痕跡を反映したものとなる。直径は、水田下に埋没した墳丘裾が3～4mほど拡大する。高さは墳頂の削平整地に加え、段築面と水田面の比高差に耕土を数十cmと仮定し、1m以上高くなる。築造時の御旅所古墳の規模・墳丘構造は、現況を大きく上回る直径約35m・高さ3.5m以上の二段築成の円墳に復元される。



明治21年地籍図味美古墳群 (1:4,000)



御旅所古墳墳丘測量図『愛知縣史蹟名勝天然記念物調査報告第十三』



御旅所古墳墳丘測量図 (愛知県史編さん室)



御旅所古墳 (昭和40年代)



御旅所古墳現況

御旅所古墳埴輪列[合成写真]



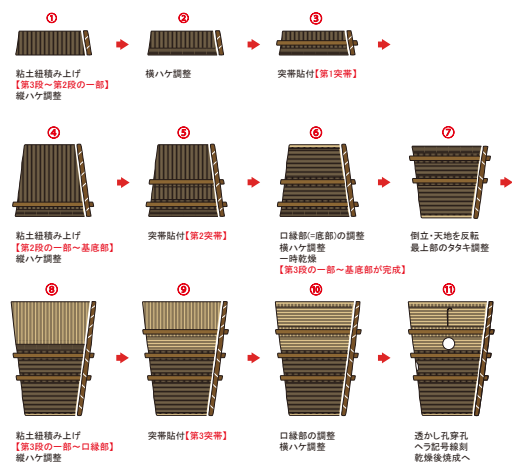
御旅所古墳埴輪列



円筒埴輪・形象埴輪出土状況



御旅所古墳 円筒埴輪集合



倒立技法による円筒埴輪の製作工程(原図小栗論文)

昭和50年の土留め工事に際して、中段平坦面の内側に約3mに亘って埴輪列が露出し、底径約30cmの円筒埴輪7点が10～20cm間隔で、ほぼ隙間なく巡る。埴輪列は3突帯4段の大型円筒埴輪で構成し、築造時は段築平坦面に160～200本、墳頂に60～100本の円筒埴輪を配列し、二重の埴輪列が荘厳な空間を創出していたと推定される[円筒埴輪の本数は、段築面は直径約26m・総延長約80m、墳頂の埴輪列は未確認だが直径10～12m・総延長約30～40mとの想定による]。

出土した埴輪の多くは、褐色で軟質な通有の埴輪とは異なる灰～黒褐色で、硬質に焼き締まり、古墳時代の焼き物=「須恵器」と同様な轆轤成形・窖窯による還元炎焼成を特徴とする。須恵器生産との技術的な関連を有する埴輪を「須恵器系埴輪」とよび、特に、尾張地域を中心に分布し、独自の規格・製作技法を共有するものを「尾張型埴輪」と分類する。尾張型埴輪は2突帯3段・器高30～40cmを基本形とし、6世紀代には前方後円墳を中心に採用された3突帯・器高60cm以上の大型が存在する。

御旅所古墳の円筒埴輪は3突帯4段の大型で、口径約35cm・底径約30cm・器高約65cmを計測し、倒立技法を用いて製作している。3突帯4段の規格は後の二子山古墳(前方後円墳・墳長94m)と共通し、円墳への採用は異例であり、倒立技法は断夫山古墳(前方後円墳・墳長150m/名古屋市熱田区)からの影響が想定される。

倒立技法とは、底部から口縁部へ、粘土紐を下から順次積み上げる通常の成形手順とは異なり、2/3ほどの高さで上下を逆転(=倒立)した後、倒立前の底部から積み上げを再開し、残る口縁部までを完成する。倒立前には上端部(=倒立後の底部)を丁寧にナデ調整するため、倒立技法による底部は一見して口縁部と識別不可能なものとなる。口縁部は倒立後の「底部」と共通する方形のほか、須恵器の甕(=端面が外傾し、外側に肥厚する)に類似したものが混在する。

倒立後、粘土紐の積み上げ再開に際して、上端部(=従前の底部)は器壁が分厚く、「タタキ」により引き延ばし、歪みを整形する。タタキは、本来、須恵器の壺甕類の成形技法で、須恵器工人が埴輪生産に直接関与した可能性を示している。

粘土の水分は重力で下位に移動するため、成形中の埴輪は上端から乾燥し硬化する一方、底部は保水され柔らかい。また、成形が進むと上部の重みが増し、自らの重量によって下部(=底部)が変形するリスクが高まり、一時乾燥により多くの時間が必要となる。倒立技法の利点は、乾燥し自重を支える強度を得た上端と未乾燥の底部を成形途中に逆転することで、一時乾燥の時間短縮(=量産化)につながる。

埴輪生産が須恵器生産と結合する背景には、尾張地域では6世紀の前半代に古墳築造の最盛期を迎え、前方後円墳を始め大小の古墳において須恵器・埴輪の需要が急増し、規格化・量産化という須恵器生産の特性を志向したためと推定される。須恵器的な埴輪の登場は地域最大の断夫山古墳の築造を発端とし、味美古墳群では、御旅所古墳の築造に際して規格・技術が伝播することとなる。

御旅所古墳から二子山古墳へ ～受け継がれた埴輪・須恵器のマツリと生産体制～

埴輪には、表面に「ハケ目」とよぶ細かな条線がある。実際は「刷毛」ではなく、木製の板状工具による調整痕で、成形時の粘土紐同士の密着と余分な粘土のかき取りを意図し、縦方向(=断続的な縦ハケ)を基調とした1次調整、仕上げを意図した2次調整がある。御旅所古墳を始め尾張地域では、2次調整に轆轤を使用し、切れ目なく周回する「回転横ハケ」が特徴である。

工具は個々の所有と推定され、条線の配列パターンによりハケ目(=工具)が区別可能なことから、ハケ目の種類が埴輪生産に関与した工人数の目安となる。御旅所古墳では、1cm当たりの密度「粗(3~4本)」・「普通(5~7本)」・「密(8~9本)」と配列を組み合わせ、13種類に分類が可能である[分類対象は土留め工事による採集資料に限られ、実相はこれを上回る]。

ハケ目以外に、工人を識別可能な要素として、器壁(胴部)の「厚み」がある。御旅所古墳の円筒埴輪は、厚さ1.2cm前後を中心として、8mm前後の薄いもの、1.5cm前後の厚いものが存在する。器壁の薄さは、軽量化・粘土の縮減・乾燥~焼結の促進等に利点が想定され、一方、相応の技量=「熟練工」の存在を裏付けるものといえる。器壁の薄い一群は、後の二子山古墳にも一定量を占め、埴輪の生産体制が一過性のものではなく、恒常的な生産体制を有した須恵器工人が埴輪生産を担った可能性(=須恵器の製作技法の応用から想定される須恵器生産と埴輪生産の結合)を示唆している。

透かし孔に、尾張地域には類例のない、基底部への穿孔手法が存在する。第1突帯を挟んだ上下=基底部と胴部(2段目)に、突帯に近接して直径約4cmの小形の円形透かし孔を交互に穿孔する。この穿孔手法は、ハケ目の相違を超えて複数の工人が採用しており、工人全体の1/3ほどを占める。

二子山古墳の3突帯4段の大型円筒埴輪では、直径約8cmの円形透かし孔を突帯間の中央への穿孔を通有とし、胴部の2段目・3段目に対面する1対を交互に配置する。一部に突帯に近接する小形の透かし孔があり、同様な事例は南東山古墳にも認め、御旅所古墳の技術系譜が存続したことを示している。

味美古墳群に特徴的な器物として、不明埴輪とした一群が存在する。出土事例は白山神社古墳・御旅所古墳・二子山古墳のほか、南東山古墳に限られ、下原古窯跡群からの供給を介して埴輪祭祀を共有していたことがうかがえる。実際の配列・使用状況は不明であるが、白山神社古墳ではくびれ部付近でまとまって出土し、墳丘上で複数を組み合わせて使用した可能性がある。

野焼き焼成の土器(縄文土器600度前後、弥生土器・土師器800度前後)に比べ、窖窯で1150度の高温焼成(=還元炎焼成)を行う須恵器は、硬く焼き締まり、水漏れしにくく、液体の容器としての利点がある。猿投窯・尾北窯を擁する尾張地域では、5~6世紀代に一般集落へ広まり、須恵器の供膳具・貯蔵具、土師器の煮炊き具による用途区分が全国に先駆けて確立する。

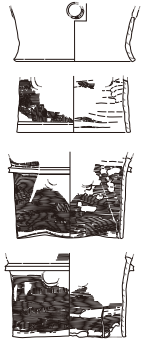
須恵器には日常品のほか、葬送専用として装飾性・視覚性を高め、複数の坏や壺を連ねた連接坏・連接壺や鳥形等の造形紐を有する特殊な「装飾須恵器」がある。6世紀中葉以降、群集墳・横穴式石室の普及に伴い須恵器を用いた葬送祭祀が定着すると、高坏・脚付壺などの脚部、甕の頸部が長大化し、祭器として、機能的よりも特定部位を誇張した視覚性が重視される。



御旅所古墳 円筒埴輪集合



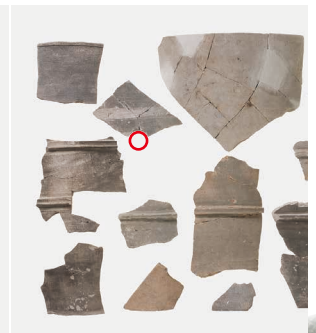
二子山古墳 円筒埴輪



御旅所古墳 円筒埴輪(基底部穿孔)



二子山古墳 円筒埴輪
(分割成形朝顔形埴輪)



南東山古墳 円筒埴輪集合



白山神社古墳
周溝内不明埴輪出土状況



白山神社古墳 不明埴輪集合



二子山古墳溝状遺構内
埴輪・土器類出土状況

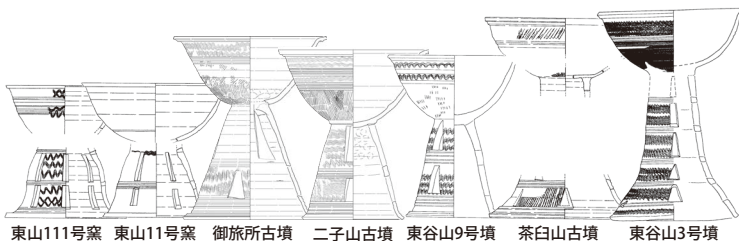
御旅所古墳は、土器類全体の器種組成は不明であるが、高坏形器台1点が坏部の約1/2を欠失する以外、ほぼ完全な形に接合・復元された。

二子山古墳では、周溝外部の溝状遺構から埴輪のほか、須恵器・土師器が細片化した状態で出土した。須恵器は蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・高坏形器台等の供膳具、広口壺・提瓶・甕等の貯蔵具のほか、装飾須恵器とよぶ脚付四連坏・子持ち蓋付脚付壺が確認された。土師器の甕が伴う点から、実際に煮炊きした食物を古墳の被葬者へ供献し、参列者と共に共同飲食(≒共食儀礼)した後に、土器を破砕・遺棄したと推定される。

高坏形器台の出土地点・状況は不明であるが、段築平坦面または墳頂において使用した供献土器の一部と推定され、御旅所古墳においても食物供献～共同飲食による葬送または墓前祭祀を執行した可能性がある。

5世紀中葉

6世紀後葉



東山111号窯 東山11号窯 御旅所古墳 二子山古墳 東谷山9号墳 茶臼山古墳 東谷山3号墳

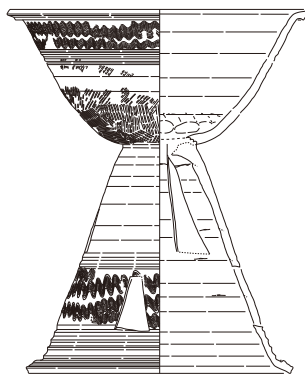
尾張地域の高坏形器台(1:16)

高坏形器台は5世紀中葉から6世紀後葉にかけて、丸底の広口壺を載せる台として用いられる。形態上は、坏部と脚部がおおよそ1:1の比率から、時代が降ると脚部が長大化(坏部に対する比率が増大)し、坏部が浅く相対的に縮小する。

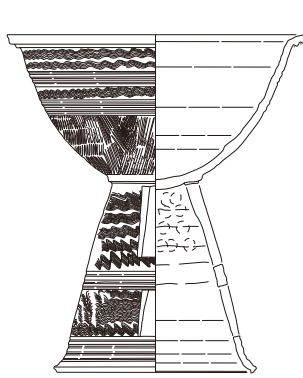
御旅所古墳と二子山古墳の器台は、波状文の施文範囲、2段透かし孔の上下の配置と方向に異なる点を認めるが、形態・文様構成等の基本的特徴は類似性が高い。法量は、坏部がほぼ一致し、脚部は軸部から裾部へ大きく拡張する御旅所古墳が裾部の直径・高さ共に上回る。型式的には6世紀第1～2四半期に比定され、高い装飾性と突線や口縁部・脚部の端部調整に鋭さを欠く点など、二子山古墳の方が総じて後出する要素を認める。



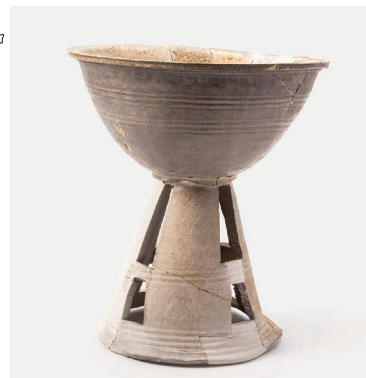
二子山古墳 須恵器集合



御旅所古墳 高坏形器台(1:8)



二子山古墳 高坏形器台(1:8)



	御旅所古墳出土高坏形器台 6世紀初頭	二子山古墳出土高坏形器台 6世紀前葉
法量	全高38cm・口径32cm・坏部高14cm・軸部径8cm・脚部高24cm・脚端部径28cm	全高36cm・口径32cm・坏部高15cm・軸部径10cm・脚部高21cm・脚端部径21cm
文様	坏部:波状文2段・横線/脚部:無文・横線・波状文・突線	坏部:波状文2段・横線・波状文・横線/脚部:波状文・横線・波状文・突線
透孔	長台形/上下不揃い(交互) 2段/3方向	長方形・長台形/上下揃い2段/4方向
特徴	文様が単純/突線の調整が鋭い/坏部:脚部=3:5/軸部の突帯なし	文様が複雑/突線の調整が鈍い/坏部:脚部=3:4/軸部の突帯あり

それは御旅所古墳から始まった… ～須恵器系埴輪の誕生 History～

西暦506年、武烈天皇の皇統が絶えた後、継体天皇[オホド王]を擁立した越前・近江・美濃等の諸地域の豪族の中で尾張氏は優位を占め、尾張連草香の娘日子媛が継体妃となり、2人の皇子が安閑・宣化として皇位を継承する。

6世紀以降、全国的に古墳の規模が縮小する中、尾張地域では断夫山古墳(150m)や二子山古墳(94m)・白鳥古墳(70m～)を始め、小幡長塚古墳・小幡瓢箪山古墳・小幡茶臼山古墳・春日山古墳・曾本二子山古墳等、60～100m級の前方後円墳が相次いで築造される。断夫山古墳・白鳥古墳は尾張氏の本貫地「熱田」に所在する一族縁の古墳と想定され、尾張氏の勢力拡大と古墳築造の動向は整合性が高い。

尾張氏は鉄製農工具を使用した耕地の開墾や土木工事、窯業・製塩等を勢力基盤とし、尾張地域北部の味美古墳群と連携することで実質的に「尾張のクニ」を統一したと推定される。両勢力の関係は、二子山古墳が断夫山古墳の約7割の相似形であり、築造規格を共有する可能性からも裏付けられる。

樹立する円筒埴輪は須恵器系埴輪の中でも尾張型埴輪とよぶ地域性の強いもので、断夫山古墳は8突帯9段・器高116cmと突出し、二子山古墳は3突帯4段・器高約70cmと一定の格差を表現する。10～20m前後の小規模な円墳・方墳では2突帯3段・器高25～35cm前後と墳形・規模との対応関係が認められる。

尾張型埴輪の規格(=突帯条数に応じた器高の大小)による階層構造は、当時の政治的関係・豪族間の勢力格差の一端を表現し、尾張型埴輪やその影響を受けた埴輪(=回転横ハケ・ヘラケズリ等の製作技法)の分布域は、尾張氏の勢力圏や豪族間の連携関係を示すものと想定され、尾張地域の全域のほか、美濃・三河地域の一部へ及んでいる。

御旅所古墳の円筒埴輪は、倒立技法による3突帯4段・高さ約65～70cmで、還元炎焼成により硬く焼き締まり、灰～黒褐色のものが多くを占める。白山神社古墳では2突帯3段・高さ約40cmで、ほぼ全てが酸化炎焼成により褐色である。味美古墳群において、3突帯4段の大型規格の採用・須恵器的な埴輪生産は前方後円墳の白山神社古墳ではなく、円墳の御旅所古墳から始まり、技術・生産体制は最盛期の二子山古墳へと発展的に継承される。

倒立技法による大型の円筒埴輪は、8突帯9段の断夫山古墳が製作技法・規格の祖形と推定される。埴輪からみる限り、白山神社古墳と御旅所古墳の段階には、豪族間の連携関係において一大画期が想定される(白山神社古墳は馬蹄形周溝・前方部の長さ等、二子山古墳との築造規格・墳丘構造上の相違点がある)。

御旅所古墳の被葬者は、尾張氏の勢力拡大の動向を握るキーパーソンの一人に挙げられる。首長墓である前方後円墳の被葬者を政治・軍事の実務的な長とした場合、円墳の御旅所古墳には異なる被葬者像(=出自・血縁関係・職掌等)が検討課題となる。

